



万世一系の父親
南海部覚悟

寝苦しい夜であった。

京都盆地に滞留した高湿の熱気が、人々の褥にしつこく纏わり附いていた。

終日稼働する部屋のエアコンも、外気の高湿のせいで効率が悪かった。

うつらうつらの意識の下、バルコニーの窓のカーテンが、夜風をはらんで大きく広がる・・・そんな気がした。

暗いシルエットが玲子の頭上を覆う・・・鋭い男の気配が、カップルの意識を一気に覚醒させた。

「―――“ようしな”の娘だな！」

野太い声に圧倒的な殺意を聴き取って、ベッドから跳ね起きた。

次の瞬間、オレンジ色の光の帯が巨大なクイーンズベッドを貫く。

男の右足にしがみ付いた笑子が、仰向けのまま拳で男の局部を突き上げる、思わず蹲った男の背後から、玲子がタウンページを翳して畳み掛ける。

傍らに立て掛けていた警棒を掴むと、一杯に伸ばして男の脇腹に叩きつけた。

苦しそうな呻き声を上げて、男の動きが止まった。

両腕を絡め取って馬乗りになった笑子が、後ろ手に手錠をかけようとしたその刹那、女の身体を弾き飛ばすように立ち上がると、床に転がっていた長い刃物を拾い上げ、二人を威嚇しながらカーテンの向こうに身を隠した。

カップルが我に返ってバルコニーから見下ろした時には、既に直下の道路を走り去ろうとしていた。

街灯の光芒で一瞬振り返る。

「―――また来る！首を洗って待ってろ！」ニヤリと笑って消え去った。

早朝から奥寺のスタッフによる現場検証が始まった。

カップルのベッドは、スチールパイプのフレームをも含めて、真っ二つに切断されていた。

マットレスの断面からは、白い無数のポケットコイルが露出している。

「買い換えただけなのにね、このマットレス・・・。」

ウンザリした顔で、玲子が呟く。

「今度は、本体も買い換えないと・・・あの男、絶対捕まえて弁償させてやる！」

厳しい顔で、笑子が叫ぶ。

現場を指揮する奥寺の視線が、ベッドの下の床面に固定されて動かない。

下階から、スタッフの一人が青い顔をして上がってきた。

「―――下の部屋の天井まで貫通してます！」

「——線状にか？」

「線状にです、ここの床の傷そのままにです！」

見ると、ヘリンボーンに組まれた分厚いフローリングの床に、長さ50cm程にわたって鋭利な傷口が口を開いている、焼け焦げたような痕はない。

「コンクリートスラブの種類を、直ぐに調べろ。一般スラブか、ボイドか？」



バルコニーに出ると、一条の登山用ザイルが手摺の外に垂れ下がっている。

「屋上のパラペットリングに固定されています。男は屋上に侵入して、此れでこの部屋まで降りて来たんでしょね。」

若い鑑識スタッフが、ザイルを引き寄せながら呟いた。

乳白の霧雨が降り続けている、午後からは雨脚が強まる予報だった。

奥寺がジップ袋の金属片を翳しながら近付いてきた。

「——見覚えは？」

「無いわ、何処にあったの？」

「ベッドの先のクロス壁に突き刺さってました、余り見かけない代物です。」

鋭い刃先が大型のカッターナイフのそれのようでもある。

「裏と表とで、素材が違うようね……。」

「裏の白い部分は恐らくセラミックですよ。鋼とセラミックを重ね合せた刃物っていうのは聞いた事がない、持ち帰って分析しますが時間が掛かりそうです。——今日ジョン・クアリは？」

「本庁の新人研修、昨夜勇んで出掛けたわ。東京が気に入ったみたいね。」

「80cm位の長さの、日本刀みたいな凶器持ってたわよ昨夜の男。ベッドを斬ったとき、刃毀れして壁に突き刺さったのねきっと……。」

笑子がジップ袋の金属片を窓の光に翳しながら、呟いた。

「その日本刀で、スチールパイプのベッドを真っ二つにして、コンクリートの床スラブに深々と切り傷を残したんだとしたら、正にスターウォーズですよ。」

「——ジェダイ戦士のライトセーバー？」

カップルの部屋の現場検証が終わり、府警本部に帰庁した刑事部屋で、報告書のキーを打ち込む笑子の手が止まる。

「ずっと男だって思っていたんですが、今振り返ると、しがみ付いた右足や、馬乗りになった背中が、何だか華奢で柔らかくって……。」

「——女だっていうの？ 局部の手応えはあったんでしょ、声も低かったし、あなたを弾き飛ばした力は、女じゃあり得ないわ。暗くて顔はよく見えなかったけど、昨夜のあの部屋の男の気配は、鮮明だったわよ。」

「そうですか……。確か“ようしなの娘”って云ってましたよね、何の事かしら、先輩心当たりは？」

「——全くないの、でも“ようしな”って人の苗字じゃないかと思う、日本人の珍しい名前とかで読んだ記憶がある。つまり“ようしな”って云う人の娘って事よね、暗い視線が私を真剣に見つめていたわ、人違いじゃないと思う……。」

「先輩の、出自に関わる？」

「——可能性は、あるわ。」

刑事部長の永山が刑事部屋に入ってきた。

「酷い目にあつたな、黒木係長。それにしても、深夜に刑事カップルの部屋を襲うとは、とんでもない賊だな。」

「直ぐに捜査に没頭したいところだろうが、皇宮警察本部から天皇退位に伴う京都御所警備の、出動要請がきている。明日から三日間、警備部に協力して紫宸殿周辺の警備に当たってほしい。」

2019年に即位した、今上天皇の退位が今秋に差し迫っていた。

15年間に亘る国の象徴としての激務は、若くて活動的であった天皇の御身体から、次第に瑞々しさを削ぎ落としていった。

国民の過大な期待に加え、予てより皇室が抱える継承に関する本質的な課題が、穏やかな御顔に深い皺を刻み込んでいった。

にこやかな御表情の中にも、憂慮すべき影が刻々と増していた。

皇位継承権第一位、皇嗣殿下が多くの国事行為を代替してはいたが、国民の憂慮は深まっていった。

皇室全体を網羅する、抜本的な改革が必要であった。

宮内庁の一部から拳がった切実な要望を受け、政府は年内の御退位、御即位を決定した。

2019年に倣い、皇室典範特例法を根拠に、全ての儀式を踏襲する。

玲子たちが警備する、京都御所のお茶会も、それら儀式の一旦であった。

普段は一般公開されている京都御所であるが、この日は建礼門を始め、内裏への入り口はすべて閉鎖され、紫宸殿に内外の著名人550人を集め、天皇・皇后両陛下御臨席の下、厳かに茶会が開催されていた。

内裏は四方を高さ4m程の築地塀に囲まれている。

築地塀の内外に約15mの間隔をあけて、制服を纏った皇宮警察警備部及び京都府警警備部の警備隊員が立っている。

玲子たち私服組は、築地塀外周を目立たないように移動しながら、警備に当たっていた。



御所の北東、猿が辻の角が何やらざわつき始めた。

長い通路の、白く霞んだ遥か向こうで何かが飛び跳ねている。

馬である！

1頭の暴れ馬が、蹄鉄の音高々と此方に近づいてくる！

皇宮警察の警備隊員が、取り押さえようと一斉に集まってくる。

その途端、馬は方向を変えて高さ4mの築地塀を飛び越えた・・・。

4mの塀を飛び越えたのである！

馬は、大慌ての警備隊員を蹴散らしながら、内裏を我がもの顔に走り廻り始めた。



玲子たちも建春門から内裏に入る。

玉砂利の足元に気を遣いながら、日華門を抜けて紫宸殿前庭の端に立ったその時、回廊を軽々と飛び越え、立木の枝を掠めて四肢を踏ん張るその馬と正面から対峙した。

——無論、ただの馬ではない。

金属の光沢を湛えた頑丈そうな骨格の要所要所を、カーボン樹脂製の黒いカバーが被い、複雑な油圧ポンプの作動音と、マイクロモーターの駆動音とを常時周囲に発散している。

本来馬の頭がある高い位置には、強い三つの光源があってじっとこっちを凝視しているようだ。

ハッと我に返って身構える。

二人のすぐ隣にいた警備隊員数人が、腰を固定して手に持ったりリボルバーを眼の高さに構えた。

「慌てないで、いま許可を取るから！」

自らのホルダーに手を添えながら、胸のマイクに叫んだ。

「——内裏警備、こちら黒木！発砲許可願います！」

その刹那、機械の馬が地響きを上げながら迫ってきた、警備員たちのリボルバーが一斉に火を噴く、横っ飛びに身をかわしたその地面を、金属の蹄が踏み荒らす、大きく振り上げた馬の前脚が、玲子の頭目掛けて落とされようとしたその瞬間、大声を上げながら脇から走り込んで来た黒い影ひとつ・・・オレンジ色の光帯一閃！

両前脚を失った機械馬が、前方に崩れ落ちる。

三つの光源が座る長い首の根元を再び一閃・・・巨大な機械の塊が、無数の樹脂パイプから餡色の作動オイルを吹き上げながら、眼の前の地面に転がり落ちてきた。

全身の力が抜けて、その場に突っ伏した玲子を庇うように、笑子の身体が覆い被さる。

ゴム毯の膨らみのような笑子の胸の隙間から、一瞬黒い影と視線が合った。

マンションの下で振り返った男と同じ、不敵な笑みがそこにあった。

直ぐ近くで鋭い爆発音がして、熱い空気の壁が押し寄せる。

様々な瓦礫が頭上から降り注ぎ、笑子の背中に跳ね返って音を立てる。

白灰色の粉体が周囲を被い、あらゆる色彩が失われていった。

茶会出席者のほゞ全員が重篤な傷害を負い、その内の65名が重体だったが、幸い死者は出なかった。

天皇・皇后両陛下は、幸い直前に御退場あそばされ、大事に至らなかった。

内裏紫宸殿は、隣接する清涼殿も含め、爆発により倒壊した。

機械の馬は、1頭だけではなかったのである。

築地塀の周囲5箇所から、都合8頭の馬が内裏に侵入し、5頭が紫宸殿周辺で体内に仕掛けられたプラスチック爆弾により自爆した。

有史以来日本国内で、皇室が物理的な攻撃を受けたのは、初めてであった。

そのことが、国内に轟々たる当局への批判と、社会のあらゆる辺境にも及ぶ不安感を煽った。

政府は対テロリズム非常事態を宣言し、全ての個人・法人・団体等の協力を求めた。

与党の一部からは、戒厳令を宣言し警察・自衛隊に特別な権限を与え、テロに対処すべく内閣に上申された。

我国の治安はこの事件を以って、俄かに騒然とし始めたのである。

瓦礫による負傷の包帯が痛々しいカップルの刑事部屋ブースで、奥寺が何時ものように油を売っている。

「――二人とも大丈夫ですか？」

「大丈夫な訳ないでしょ！庭に敷き詰めていた細かな砂利が飛んできて、全身擦り傷だらけ・・・すぐ横の築地塀の壁には、拳位もある大きな玉砂利がめり込んでたわ、九死に一生ってこの事よね。」

「ジョン・クアリは？」

「――だから、昨日から本庁で新人研修。この前も云ったじゃない！」
額に大きな絆創膏の笑子が、呆れ顔で呟く。

「昨日一杯で切り上げて、今日帰って来るはずよ。」

「昨日の事件で全国の警察、ノンビリ研修なんかしてる雰囲気じゃなくなってますからね・・・。」

「貴方も此処で油売ってていいの、爆発しなかった3頭の馬の鑑定は？」

「3頭とも、本庁の科警研に押さえられました、地方の科捜研には任せて貰えないようです。今は専ら現場の飛散物の収集鑑定、爆発した馬の破片を、チマチマ集めています。」

「其れより僕は、マンションに侵入した賊の方に興味があるんです。昨日も現場に現れたんですよね。」

「――そうよ、全身黒ずくめでまるで忍者のようだったわ。暴れ馬の前脚を斬って、私を助けてくれたの。」

「馬の骨格素材はA7075、所謂超々ジュラルミンです、樹脂製の油圧管や電装ラインが取り巻いて、カーボン樹脂製のカバーで覆われています。それらを常温(冷間)で一刀両断出来る刃物なんかあり得ません。マンションの床スラブの貫通傷を見て驚いたんですが、D13の異形鉄筋をものの見事に断ち切っています。それも、引っ張り破断やせん断破断ではなくって・・・。」

「――刃毀れした破片の分析は終わったの？時間かかるって云ってたけど・・・。」

「セラミックと金属銅が交互に何層もコーティングされているのは解りましたが、何の為のコーティングなのか・・・。」

その時、ジョン・クアリがキャリーバックをころがしながら、息を切らせて刑事部屋に入ってきた。

「キョウト駅大変デス！アチコチデ爆発オコッテ、ミンナ逃ゲマワッテ！ケイタイ繋がラナイシ、チカテツ止マッテルシ！」

「――何ですって！」

惨憺たる状況だった、駅ビルの象徴だった大階段には彼方此方に穴が開き、巨大アトリュームのガラスが全て落下して、足の踏み場もない。

其処彼処に強化ガラスの破片の、堆い山が出来ていた。

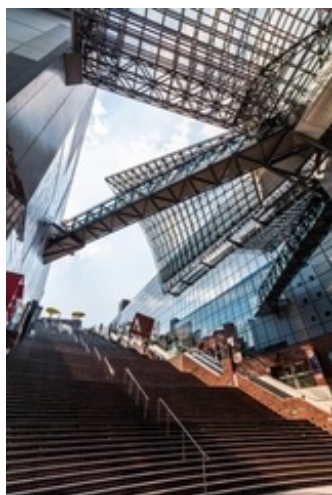
昨日の事件を受け、緊急に帰京することになった皇室御一行を狙ったテロに違いない。

最初の爆発の3分前に、御一行を乗せた新幹線の特別列車が京都駅を発車していた。

当初宮内庁は、昨日中の御帰郷を考えたが、両陛下の御動揺を考慮し医師を帯同させたまま、御所内にお留まり頂いた。

移動時間の短いリニアの利用も考えられたが、信頼性の面より、開業間もない交通機関への御乗車は見送られた。

犯人はそれらの経緯を知っていたのか・・・。



駅を利用していた一般客約550人が負傷し搬送されたが、此処でも幸運に死者は出なかった。

ジョン・クアリは、逃げ惑う市民に追われ、下立売通の府警本部まで走らざるを得なかったのである。

「――爆弾は、構内に仕掛けられていたのか？外部から持ち込まれたのか！」

府警警備部長が現場のコンコースで大声を上げる。

「――頭の無い牛みたいな四足の機械が、何頭も駅に走り込んで来たんです！あんなの防ぎ様がありません。」

気の弱そうな担当警備課長が、今にも泣きそうな声で答える。

見覚えのある金属の脚のようなものが、玲子たちの足元に転がっていた。

京都市全体が、テロの恐怖に打ち震えていた。

この日の午後から、京都を脱出する市民や観光客の車列が、周囲の高速道路を埋め尽くす。

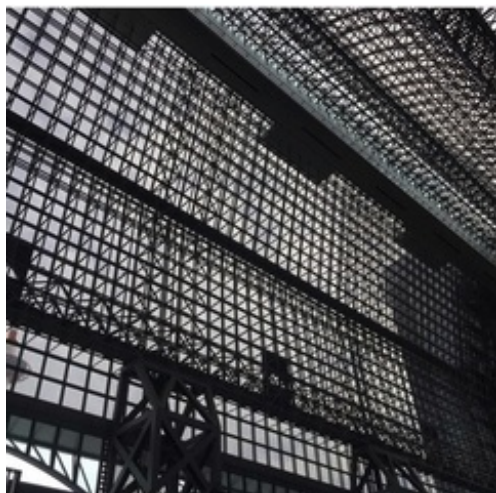
京都から離れられない地元民は、息を潜めて自宅に引きこもった。
世界的な観光都市が、殺伐としたゴーストタウンに趣を変えた。
四条通りを走りぬける車も殆ど見当たらない、広い車道に土産物の包み紙が風に吹かれて散乱し、片付けようとする人影も無かった。

「——とんでもない物が手に入りました！ラボまで来てくれませんか！」
玲子の携帯に奥寺からTELがあったのは、その日の夕方だった。
SRIのラボに出向くと一番奥のブースから手を振っている。
何やら長い刃物を左手に持っていた。

「京都駅の土産物売り場のおばちゃんが拾ったのを、譲り受けてきました。コンコースの床に散乱した売り物の木刀を回収したら、本物の刀が混じってたって云うんです。」

刃渡り50cm、白木の柄と合わせて80cm程の日本刀である。
同じ白木製の鞘もそろっている。

「上には云わないで下さいね、科警研に内緒で拾得してきたんですから……。」
「——やっぱりあの忍者の持ち物？」
「上階に居た目撃者の話によると、黒づくめの男が、駅に侵入してきた機械の牛2頭を、持ってた刀で撃退したそうなんです。直後に背後から3頭目に突き上げられて、コンコース中央の吹き抜けから落下していった、その直後爆発が起こって何も分からなくなっただけです。」



「——注目したいのは、この刃先です。」
そう云いながら、カップルの目の前に日本刀の冷たい刃先を突き出した。
「二重になってる！レディースレイザーの刃先みたい。」

「2枚の刃を水平に重ねて緊結しています。刃と刃の間に楔形の僅かな隙間があるんですが、その内側の刃面にセラミックと銅のコーティングが施されています。」

「柄の中には、高性能なキャパシタ (コンデンサー) があって、刀身に超高電圧を印加する仕組みになっています。」

「鞘も高性能な充電器で、柄のキャパシタに急速充電が可能です。恐らく忍者は、この刀の他に小型のモバイルバッテリーを持ち歩いていたと思います。」

「一体何なの、この刀——？」

「今から時間をかけてよく調べますが、私としては、モンロー・ノイマン効果を期待した特殊な武器だと思います。」

「マリリン・モンロー？」

笑子が周囲を憚らず、丸い眼を見開いて叫ぶ。

「——大きな声出さないの！成形炸薬のことよね奥寺君。」

「今、刀身本体に微弱な電圧をかけますと、コーティングされたセラミックが絶縁層となって、その上の銅の層が刀身とは逆の極性で帯電します。つまり、逆の極性を繰り返しながらコーティングされた回数だけ、帯電した銅がセラミックを挟んで存在する状態になります。」

「そこでいきなり逆極の超高電圧を刀身にかけると……。」

玲子が間の手を入れる。

「クーロン力によって最外層が剥離、楔型の隙間の中心面辺りで銅がユゴニオ弾性限界を超えて、刃先方向のメタルジェット (金属噴流) が発生し、刃の先にある対象物を切断することが出来ます。」

「気化した銅の熱で切断するって云うの？マンションの床に焦げた跡は無かったけど……。」

不思議そうな顔で笑子が呟く。

「銅は高温にはならない、可塑流動化した固体金属が常温 (冷間) で物を斬るんだ。」

「成形炸薬は戦車や軍艦のアーマー (装甲) に穴を開ける為の軍事技術よ、第一次世界大戦で初めて使われた。円錐状のライナーを刃物のような平面に展開すれば、物が斬れるわ。」

「恐らく、刃先が対象物に接触する衝撃で、刀身に超高電圧が印加される仕組みなんでしょう。メカニズムは至極単純で、刀身の片面に精密にセラミックと金属銅をコーティングする技術さえあれば、誰でも製造可能だと思います。」



長い沈黙がラボを包み込む、サッシ上部の換気用スリットから、今にも泣き出しそうな梅雨の夜の湿気が、空調された内気をも湿らせてゆく。

「でも、その刀で先輩を襲ったマンションの賊が、今度はテロの襲撃から先輩を救ってる訳ですよね・・・如何してなのでしょう？」

「今の段階じゃ全く分からないわ。でも、敵の敵は味方ってこともあるし・・・。」

「やっこさん機械の牛に突き上げられた時に、恐らく怪我したようで、吹き抜けの手摺にかなりの血痕がありました。目撃者によると、吹き抜けから落下したのは他にいないということですので、忍者の血液に違いありません。」

「――如何したのその血液？」

「穴見女医に、鑑定依頼してます。」

京都駅に、現場警備のため残っていたジョン・クアリが、刑事部屋に帰って来ていた。遂に降り出したのか、雨で靴とズボンの裾が光っている。

「・・・ニホン怖イデス、機械ノ牛、コノ国ニシカイマセン。」

真剣な眼で呟いた。

「――アフリカに帰りたくなかった？」

「イエ・・・人ガ人ヲ殺スノガ当たり前ノ国ヨリ、マダイイデス。」

「明日朝一番、大学病院まで付き合っただね・・・。」

「アノ、怖イ女医サン！」

「そうよ、日本は怖いものだらけね・・・。それと、笑ちゃんは“ようしな”が人の名前なら、その人物を調べてくれない、保守系の政治家、官僚、旧財閥、旧華族、右翼関係者、宮内庁OB、皇室関係者・・・。」

「やっぱり、そう云った世界の人物なんですか？」

「何の前触れも無く深夜に襲ってきた賊が、皇室を標的にした連続テロ事件に関与している、2度とも狙い澄ましたように関わってるわ・・・あの忍者が、皇室と無関係だとは如何しても思えないのよ。手掛かりは奥寺君の刀と、血液と、“ようしな”という苗字

だけ。」

「——それともうひとつ。」

「——はい？」

「明日は必ず東京からあの人物が出張って来るから、その覚悟でね。」

「わかりました！絶対トラップに引っ掛からないよう、肝に銘じます！」

梅雨末期の強い雨が、早朝から降り続けている。

大学病院のゲートの先の、道路沿いの並木も、幹の周りが白く霞んで、その下を歩く人の影を、雨の中に滲ませていた。

ジョン・クアリと穴見の研究室を訪れるのは2度目である。

前はジョン・クアリが、その黒い痩身に興味を持った女医から、研究サンプルにされそうになった。

「じゃ、あなたに夜這いかけてきた賊と、テロに応戦した忍者が同じ人物だって云うの？」

「少なくとも深夜に私達を襲った人物と、京都御所で機械の馬から私を救ってくれた人物は、眼の光が同じでした。マンションに残された刃物の破片と、京都駅で使用された刀が同じものなら、3人は同一人物だと思います。」

「そして、賊と格闘したあなたの相方は、相手が女じゃないかって云うのね？」

例によって長い電子煙草のパイプから、微かな煙を燻らせながら、まるで年老いた魔女の様な風貌で、年代物の肘掛椅子に収まっている。

暗い朝だった、夜から続く雨雲が、まだ全天を黒々と被っている。

研究室の古いスチールサッシを、休むことなく冷たい雨が叩く。

「依頼された血液の鑑定結果だけど・・・。」

「——性別は男性。Y染色体上の**SRY**遺伝子も、立派に発現している。でも、通常と多少違うところもあるわ、ひよっとすると胎児期の性ホルモン(アンドロゲン)シャワーが、異常に少なかったか、全くなかった可能性がある。これはね、比較的近縁で交配を繰り返してきた旧家の遺伝子によく現れる形質なの。」

「以前にも説明したように、有性生物の原初的な性はメス、オスはY染色体上のSRY遺伝子が発現して初めてオスになる。でもそれだけじゃまだ不十分で、胎児期に男性ホルモンの大量分泌に晒される必要があるの。男系の家系で、閉鎖された近縁から配偶者を選んでいた日本の旧家には、そう云った特徴を持った子孫が、多く産まれるものよ。」

「——どう云った特徴でしょうか？」

「主に、脳に対する性ホルモンの作用、不思議なことに分泌されたアンドロゲンは胎児の脳に入ると、エストロゲン(女性ホルモン)に変換され、女性ホルモンによって男性脳が造られるの。女性にはこんな現象はないわ、女性の卵巣から分泌されるエストロゲンは、脳内に取り込まれずそのまま女性脳として発達する。」

「——性同一性障害？」

「それも一つの特徴ね、でも笑ちゃんは賊の身体が柔らかくって華奢だったって云うんでしょ？」

「声や体形、体臭は明らかに男です。意志の強そうな眼光もやっぱり男だと思うんですが・・・。」

「それは、あなたの主観でしょ・・・いずれにせよもう少し時間をかけて調べてみるわ。人間はね、生命維持に関与するX染色体さえあればどんな形でも産まれてくる可能性があるの、XX型の男性、XXY型の男性(クラインフェルター症候群)、XO型の男性と女性(ターナー症候群)、モザイク型って云うのもあるのよ。」

「——モザイク型？」

「細胞ごとにX染色体とY染色体の組み合わせが異なる個体・・・雌雄モザイク(ハーフサイダー)の原因だとも云われているわ。」

玲子の背後に座るジョン・クアリに視線を移すと、「比較検討の為に、あなたの用心棒に採血させて貰えない？此の子XYYの超男性型かも知れないわよ・・・。」

昼過ぎになって雨が止んだ。

雲の隙間から、湿っぽい陽光が差し込んでくる。



遠慮容赦なくずけずけと刑事部に入ってきた青年が、レインコートを脱ぎ、サングラスを外すと、刑事部屋のドア越しに大声を上げる、「――黒木係長はおられませんか！」

「――三浦副長官！」

ブースから玲子が立ち上がって、手を振る。

相好を崩した青年が、懐かしそうに近付いてくる。

「一別以来です、玲子さん！」

「その折は、お世話になりました。命を助けて頂いて……。」

「お気になさらないで下さい、お陰様で重大な事件を解決して頂いたのですから。」

永山を始めとする刑事部の幹部が、大慌てで集まってくる。

「――も、申し訳ありません。今日は黒木係長に個人的な話がありまして……黒木係長と二人だけになれる部屋は……。」

「わたしを口説こうとされても、無駄ですわよ。」

「それは、解っております。」

二人が刑事部隣接の応接室に入って行った直後、笑子が帰ってきた。

ジョン・クアリから成り行きを訊いた笑子は、当然に気が気でない。

「もう一時間になるじゃない！内閣官房副長官が、地方警察の刑事に個人的にどんな話があるって云うのよ！」

応接室にも鳴り響く金切り声である、刑事部長の永山が顔を顰める。

応接室のドアが開くと、「――白河刑事、野暮用で玲子さんお借りしていました。話は済みましたので、お返しいたします。」

にこやかな表情で、青年官僚と女刑事が連れ添って出てきた。

「リニアが開通して、京都にも大阪にも宿泊することが出来なくなりました、本当は皆さんと木屋町辺りで食事したいんですが……夕方から閣議ですので、これで失礼します。今度、プライベートの折は宜しく願いいたします。」

それだけ云うと、慌ただしく帰って行った。

刑事部屋のスタッフ全員、嵐が過ぎ去ったかのように、顔を見合わせた。

「―――なに訊かれたんですか？」

「今度は、あなたが尋問？―――マンションで襲ってきた賊と、御所に現れた忍者に関してよ。タブレットの中の顔写真を何枚か見せられて、似た男はいないかって。」

「マンションじゃ暗くて分からなかったし、御所の忍者は顔を隠していたじゃない。でも一人だけ気になる顔写真があって、黙っていたけど感付かれたかも知れない・・・面長で色白の顔よ、良く考えたら街灯の下で一瞬振り向いた顔に少し似てた。」

「それと、私の出自に関して訊かれたから、当たり障りのない話をしておいたわ。何時ぞやの、潜水艦キャビンの中での話、モニターしてるに決まってるのにね。最後に、この名前に記憶がないかって、やっぱりタブレットの中の苗字を幾つか見せられた。その中に“用品”があったのよ！」

「——その“用品”ですが、やはり人の苗字のようです。広島県内で約100人ほどが“用品”と名乗っているようで、何れも地元の古い家系だそうです。」

「広島県内・・・？」

「古くから存在する苗字で、かつては全国に分布していたようですが、或る歴史がもとで、激減したと云われています。」

「——それは？」

「治承・寿永の乱。」

「源平の戦い？」

「——流石先輩！よく御存じで！」

「“用品”一族は代々平氏に仕えた西国の武士で、都では御所の警護の傍ら、公家・社寺への日用品御用達の仲介を、一手に握っていたようです。」

「封建制以前の、既得権益団体ね。それで“用品”っていうの？」

「由来は知りませんでした、何れにせよ壇ノ浦で平氏が滅亡し、“用品”一族も存亡の瀬戸際に追い込まれましたが、山中に身を隠し落人として命を繋ぐことはなく、“用品”という名前を捨て、時の為政者の軍門に降ったという話です。」

「一部が造反し名前を捨てずに、広島山中に籠った——？」

「いえ、時代が下り織田信長の西進に伴い“用品”の家名を復活させたようです。」

「同姓の著名人は？」

「何れも歴史ある名家には違いありませんが、特に著名人は輩出していません。多くが教育者で、明治以来学校の教諭をしていた人物が多数です。」

「公家や社寺と付き合いがあったなら、皇室と全く無関係という訳じゃないわね。」

「付き合いといっても・・・840年も昔の話ですよ？」

「その840年前に、皇室の年譜の中で唯一の特異点と云える事件があったわ。」

「安徳天皇の崩御ですか？」

「——そう、神器の不継承という意味で、歴史上の特異点よ。」

「でも、天皇家はその後更に45代も続いているんでしょ？」

「天皇の立ち位置は、歴史上常に日本の主権側にあった、権力抗争によって主権が移動するときも、破綻なきよう巧みに皇位が継承されてきたわ。正当に即位した天皇を、国体として担いできた勢力が権力抗争に敗れ、その直接の結果として戦の中ご幼少で崩御され、神器が継承されなかったのは、唯一この時だけなの。」



「でも、皇室の一族に生まれただけで、当然のようにその時代の権力に翻弄されながら生きて行かなければならないなんて、何だか哀しいですね。」

「それは全ての日本人に云えることよ、権力に翻弄されない国民なんて居ないものね。皇室が哀しいのは、権力に翻弄された訳じゃなくって、利用され続けたこと。日本の権力者は自ら主権者と決して名乗らない、日本国憲法が制定される前までは、天皇は国体であって、事実上の主権者がそれを振りかざして国を統治していた。天皇という国体の下であれば、主権者が平氏であろうと、源氏であろうと藤原氏であろうと、日本国民であろうとも、何でもいいのよ。」

「国体って何ですか？」

「万世一系って分かる？」

「——バンセイイッケイ？」

「同一の家系が永遠に続くって意味。万世一系の天皇によって、私利私欲なく公平に治められる国家、というのが日本の国柄 (国体) なの。」

「会社創設の約款みたいなものですか？」

「現実との乖離は、眼を覆うばかりね・・・。」

其処で急に黙ると、ジョン・クアリのぎよろ眼をじっと見詰めたまま、「ひよっとするとそんな憤りが、あの忍者を突き動かしている動機かも知れないわ、きっと！」

刑事部屋に夕暮が近付いてきた、西の連窓から紅い夕日が長く差し込み、所在無げに窓際を歩き回っていた永山が、ブラインドを下ろし始めた。

「テロ実行犯に関しては何か分かったんでしょうか？」

玲子が立ち上がって刑事部長に質問する。

「公安調査庁主体で、警察庁と皇宮警察本部が直接動いているようだから、所轄の俺たちには十分な情報が流れてこないんだ。本部長からは、忍者に専念するよう云われている。」

「科警研からは、多少の情報開示がさっき奥寺にあったようだ。テロに使われた機械の馬と牛は、20年前にアメリカ陸軍が開発した兵站輸送ロボットを改良して、自律制御

システムを追加したものらしい。指定された場所に物を運ぶのに特化したロボットで、古いシステムだが阻止するのが難しいらしい。」

「其れに関しては、三浦副長官からも若干の説明がありました。ロボットの分析に関しては、佐藤代表理事の協力を得たそうです。」

「佐藤代表理事？あの丹波のショッピングモールの？——一流石エリート官僚だ、人を誑し込むのに長けている。」

「三浦副長官は、これから如何するって仰ったんですか？」

「次は伊勢だろうって・・・退位前の両陛下が、2週間後に伊勢神宮を参拝される儀式が予定されているわ。関西中の警備関係職員を総動員して、万全を期すって、同じ轍は踏めないから、詳しくは言えないけど或る新兵器を使うそうよ。」

「——新兵器？」

伊勢は神秘的な清白の朝霧の中、凜と張り詰めた空気に包まれていた。

大阪府警・愛知県警・京都府警を主力とした、行幸特別警備団は総勢約3万人が皇宮警察本部の指揮の下、伊勢市内随所に展開している。

名古屋から伊勢までの御移動に伴い、両陛下が利用される近鉄沿線は、三重県警の警察官総動員による厳重な監視の下にあった。

当初2019年に倣い、内宮に御一泊、賢島のホテルに御一泊、計2泊のご予定であったが、京都でのテロを受け一日の内に外宮・内宮への参拝、宿泊は内宮の一泊のみという、お忙しいスケジュールとなった。

近鉄宇治山田駅より御車に乗り換えられ外宮へ、参拝を終えられそのまま内宮へ、退位報告の儀式は厳重な警備の中、粛々と進められた。

両陛下の行幸啓、通常なら沿道を日の丸で埋め尽くす伊勢市民の列も、今日はピリピリとした警備の背後で、不安そうに息を潜ませていた。

まだ、遷宮の白木の肌が瑞々しい宇治橋の中央を、両陛下がお乗りになられた御料車が静々と進む。

木と木が擦れあう乾いた音が、見守る警官たちの耳に新鮮だった。

内宮での儀式が終わり、両陛下が内宮斎館行在所にお入りになられたのは、陽も西に傾いた18時過ぎのことであった。

五十鈴川の御手洗場に繋がる白砂の参道に、この季節には珍しい爽やかな夕風が吹き渡る。



参道が交叉する要所要所には、高輝度のバルーン照明が深夜の警備に備え配置されていた。

約5m間隔で立つ機動隊員の紺と黒の防護装備、ポリカーボネートの透明盾が、やがて神域の闇に消えようとしている。

神聖で平和な時間が流れていった。

内宮参集殿前の芝生に幾つかのテントが張られ、各警察の警備本部が置かれていた、両陛下がご宿泊される行在所も眼の前である。

刑事部長の永山が、幹部の打ち合わせを済ませてテントに帰ってきた。

隣に立って頭一つ際立つジョン・クアリの長身を見上げると、「何だ、頭問えるのか？ テント越しに目立ってしょうがないな・・・。」

「機動隊の列はどこまで続いているんですか？」

赤外線監視カメラの、マルチモニターの映像を確認しながら、奥寺が質問した。

「斎館と参集殿の周りをずっと取り巻いている、水も漏らさぬ態勢だ。」

「昼間より大分人数が増えたんじゃないですか？」玲子が呟く。

「三重県警の機動隊員が移動警備を終えて合流している、もう3m間隔になってるんじゃないか？」

「アソコノ3人、ナンダカオカシイ、サッキカラ全然動カナイ。死ンデルミタイ・・・。」夜目の利くジョン・クアリが、唐突に呟く。

「皇宮警察でしょ！彼らじっと動かないのが、仕事なの！」笑子が明るく答える。

「でも、やっぱり変ね？10分前と全く変わってない。奥寺君、カメラ動かして表情映してみて！」

「顔が3人とも異常に暗いですね、緊張してるのかな。他の機動隊員は普通に明るいのに・・・あっ！こっちを向いた、嘘だろ！眼が点滅してる！」

其れを訊いて、急に玲子が走り出した、笑子とジョン・クアリが後を追う。

「そこの3人！機動隊員じゃない、捕まえてえ——！」



玲子の意を解した近くの隊員たちが3人に飛び掛る、それを強引に振り払い行在所に向けて走り出す、ギクシャクした動作だが異常に早い。

永山のリボルバーが火を噴き、玲子と笑子がそれに続く。

火花が弾け手応えがあったが、びくともしない。

ジョン・クアリが参道の玉砂利を掴んで振りかぶる、後端の1人の脚部に命中し、もんどりうって防護装備が外れる。

京都で見たのと同じ、金属とカーボン樹脂の構造が現れた。

その時だった！黒い影とオレンジの光帯が、機械の3体に絡んだ。

忽ち2体が金属の塊となって崩れ落ちる。

残る1体を追って建物内に進入する、行在所の反対側からも、警備員たちの怒号が上がる！

「―――館内警備員は盾になれ！陛下の御寝所に近づけるな！」

インカムが激しく交錯し、悲鳴が混じる。

応答する声が、全員切羽詰っている。

「―――皇宮警察C班、御寝所に突入！銃器は使えないぞ、全員スクラムを組め！」

「―――敵8体と交戦中！押し返せ！」

「―――退路を開け！御上をお通し申せ！」

鈍い破裂音が連続して、行在所から熱風が溢れ出てくる。

陽炎揺らぐ熱気の向こう側に、参集殿に避難される高貴な御姿が確認できた。

主賓のいなくなった斎館の屋根を、黒い影が駆け抜ける。

ジョン・クアリが地上から投じた玉砂利を、居合一閃空中で粉碎した。

マンション下の街灯の中で、にやりと笑った同じ顔が、3たび玲子に視線を合わせる。

其れをかき消すように、「―――クラドニシステムだ！」

奥寺の大声が内宮の森の、暗い夜空に響き渡った。

「8体の内、4体が起爆したんですが、クラドニシステムで爆発を抑え込まれたんですよ。」

周囲が白んできたテントの中で、奥寺一人が興奮している。

「どのプラスチック爆弾も、衝撃波を生成できず、その後一時間に亘ってジワジワ熱を出し続けたんです。」

行在所を襲撃した人型機械は全部で10体であった。

何れも、夜になって合流した三重県警の機動隊に紛れて、侵入したようだ。

暗い中、ヘルメットを含む防護装備、盾を構えると一般の機動隊員と見分けがつかなかった。

起爆しなかった6体の内、4体はあの忍者が刀で斬り倒した。

残る2体は館内警備の皇宮警察が寄ってたかって押し倒し、配管を引き千切って撃退した。

「三浦副長官が、佐藤代表理事に協力を求めた話を、玲子さんから訊いた時に気が付くべきでした。何れにせよ我国でクラドニシステムを、対テロ装備として本格的に運用したのは、今回が初めてのケースです。」

眼をキラキラさせながら、奥寺が一気に説明した。

天皇・皇后両陛下は、参集殿の堅牢な建物内に側近と共に非難され、一切のご支障は発生しなかった。

皇宮警察官、機動隊員に若干名の負傷者が出たが、今回も幸い犠牲者はなかった。



一週間後、5名の被疑者が逮捕された、何れも日本人だ。

テロ行為の主体は海外に在って、日本人被疑者はその指令に基づき、実行したようだった。

後日、収監された被疑者の談話が、複数のメディアにリークされた。

テロ組織の素性に関して、東南アジアに拠点を持つ反体制過激派だと証言している。彼らが企画し、物資を中国及びインドで調達、日本国内のスタッフを組織して実行した。

現時点でテロ組織から犯行声明が無いのは、3回とも失敗だったと判断しているからだ。

彼らは成果を上げられなかったテロに関しては、自らの行為と決して認めない。

如何して皇室を狙ったかとの質問に対して、被疑者の一人は、「ヨーロッパやアメリカの場合、一般市民を無差別に襲撃するテロが有効であるが、日本の場合、皇室を狙う方がより効果があると判断した。」

これらのメディアリークにも増して、遥かに世間の衆目を集めたネット上の書き込みがある。

其れはこれらとほぼ同時期に、主要なSNS上に匿名で掲載された。

“この国の憲法にあるよう、皇室は主権者である国民の総意に基づいて存在する。この原則は、国民に主権が存在しなかった過去の時代に於いても、また同様に維持されてきた。つまり、皇室の立ち位置はその時代の国民の総意に基づき、往々にして主権と乖離してきたのである。皇室自体が主権と主張する面々の為には、その時代の権力と乖離してきた、と言い換えるべきかもしれない。何れにせよ、我々は88年前に主権を放棄し、その存在を国民の総意に委ねた。同時に、本来国民すべてに認められるべき基本的人権も放棄した。ただし此れも、それ以前の時代と何ら変わるころでは無い、歴代

の皇室は、その時代の権力に翻弄され、利用され、自由に生きることも死ぬことも許されなかった、今でも基本的に通常の間人ではないのである。そのようなことを既に2,695年も続けている。時代は移ろい、今後この国の国民から主権が離れることはあり得ない・・・もうそろそろ良いのではないか？”

“我々”“そろそろ良い”と標された部分が、ネット上に轟々たる論議を呼び起した。

当然にこの書き込みに対する回答が、無数掲載される。

以下は、その内の一つである。

“私達日本人は、生きる道標を見失った時、まず周りを見習います。そして周りが信用できないとき、友人を頼ります。友人が頼れないとき、兄弟に助けを求めます。それが駄目なとき、親に縋ります。親に縋れないとき、全ての父親である御上の前に身を晒すのです。そして御上のお姿を鋳型として、自らの身体が造られていることを確認して、生きる方向を見出すのです。哀しいことを仰らないで下さい、永遠に日本人の原基であり続けてください。”

――5か月後、既に季節は冬である。

御退位の礼、御即位の礼に拘る一連の儀式も、予てからの予定通り恙無く挙行され、元号も改元された。

一週間足らずで、新元号元年も終わりを告げる。

国内の重要警備案件としては、来春東京で行われる祝賀御列の儀(ご即位パレード)を残すのみとなっていた。

日本でのテロを受け、インドネシア政府が動いた。

大規模に軍を動員して、国内から反政府勢力、テロ組織を一掃したのである。

ジャワ島の鉄道交通インフラを、融資をも含めて日本の援助で整備する、新たな協定が締結された。

社会の背後に蔓延る、金銭を介した癒着を一切認めなかった。

東南アジアの反体制過激派も、自らの存在維持に人員と資金を割く必要に迫られたのである。

――刑事部の忘年会の帰りだった。

一台のタクシーにカップルと奥寺、ジョン・クアリが賑やかに乗っていた。

混雑する市街を避け、人気のない山裾を選んで進む。

立命館大学北面の“きぬかけの路”に差し掛かった時だった、タクシーが何かにぶつかって突然停止する。

運転手と、助手席のジョン・クアリが様子を見に車を降りる。

玲子が後ろのドアを開けて車内から様子を伺おうとしたその時だった！

オレンジの光帯が煌めいて、ドア本体が吹き飛んだ。

髪を鷲掴みにされそのまま路面に引き摺り出される、刀を上段に構えた背後から笑子がしがみ付く。

空気を切り裂く鋭い音がして、黒装束の額に小石が命中した。

男が一瞬たじろぐ、立ち上がった玲子が闇の中を駆けだす、後を追う黒装束に向けて、ジョン・クアリの投石が連続して命中する。

最後の一投を空中で叩き落とした直後、血だらけの顔で振り返る。

「故あってこの女の命を絶つ、邪魔をするな！」

「——ソコカラ動クナ！動ケバ眉間ヲ狙ウ！」

そう云いながら掌中の石を構えた。

不思議な間が周囲を押し包んでいた。

誰一人息も出来ない——。

一切がその場に張り付き、時間さえも固定されたようだ。

やがて、黒装束の緊張が崩れた。

二人の距離を考えれば、圧倒的にジョン・クアリに有利だった。

口に溜まった血の塊を吐き出すと、玲子に向き直り、「——何故命を狙われるのか、知りたければ広島に來い！」

それだけ云うと、そのまま闇の奥に消えた。

早朝から、穴見が玲子を訪ねて刑事部屋に顔を見せていた。

「また襲われたらしいわね、それに関連してあなたに伝えたいことがある――。」
応接室には、永山と奥寺が待っていた。

穴見と玲子、笑子に続いてジョン・クアリが部屋に入る。

「道路にコンクリートブロックの破片が散乱していました、タクシーはブロックに衝突して停まったんです。」

奥寺が玲子の耳元で囁いた。

「あの血液、更に分析したらいろんなことが分かったわ……。」

全員が椅子に腰を下ろしたのを確認して、穴見が話し始める。

「思った通り、モザイク (ハーフサイダー) だった。雌雄双方の特徴を同時に持ち合わせる、其れもかなり高度なハイブリッド個体。」

「――ハイブリッド？」

「そう、性的な欠点を補完し合ってるわ。男性的な筋力、身体の物理的な丈夫さと、女性的な生命力、免疫力、身体のしなやかさを併存させている。勿論、他人の子を産んだり、人を孕ませたりも出来る筈よ。」

「身体の筋力としなやかさが並外れてた、だからあんな動きが出来るんだ……。」

永山が感心する。

「身体の頑丈さは、機械の牛に突き上げられて、吹き抜けの穴から落下しても死ななかつたくらいですからね。」

奥寺が呟く。

「此処からが本題よ。――DNA鑑定を進めていくうちに、**STR**タイピング反復パターンが、或る人物のそれと酷似していることに気が付いたの、その人物が、今この部屋の中に居るわ。」

全員の顔に緊張がはしる。

「玲ちゃん……あなたよ。マイクロドローンの時、採血したあなたのDNAと、ほぼ同じパターンだった。」

一斉に玲子に視線が集まる。

虚ろな表情で、「私と、あの忍者と……どれ位近いんですか？」

「――兄弟、以上ね。」

息を呑みこむ気配が、部屋中に拡がる。

「何かの理由があって、実の兄弟から命を狙われてるのよ――。」



「もうひとつ教えてあげる、あなた達のDNA上に、共通の損傷部位があったわ。多くは修復されているんだけど、まだ残ってるのもある。3代ほど前に強い放射線を浴びて損傷した部位が、そのまま遺伝して継承された可能性が強いわ。」

「———広島ですか？」

今度は笑子が低く呟く。

「・・・穴見先生、まだ何か隠してらっしゃることがありますね？」

哀しそうな眼で、玲子が穴見を見上げた。

「話したいけど、今は話せない。私にも永山部長にも強い圧力が掛かっているの、これ以上はあなた自身で調べなさい・・・自らの出自を調べることは、人の権利で誰にも邪魔されないわ。」

「カカリチョウ、ソウシタホウガイイ。ナニモシナカッタラ、イツカアイツニ殺サレル。」

長い沈黙が続いた。

フッと我に返ると、そのまま真剣な眼差しで永山の眼を見詰める。

「———分かった黒木、広島県警には話を通してある。捜査一課二係長で赴任しろ。当然白河も帯同するんだろ？ジョン・クアリ、お前は用心棒だ。あの忍者はお前にしか防げない、だとしたらもう京都に用はあるまい・・・どうだ、他に同行したいのはいるか？」

奥寺の眼がキラリと光った。

「———ラボに帰って、何かへまやらかしてきます！」

「私もそろそろ異動の時期よね、広島大学病院の人脈、整理しとかないと・・・。」と云いながら、穴見が帰り支度を始めた。

玲子の膨らんだ二つの瞼から、止めようの無い大粒の涙が、堰を切って溢れてきた。

—————おわり。

以上、全てフィクションであり、登場する個人・団体と名称等が共通していても、一切の関係がありません。悪しからずご了承ください。

尚、添付した写真の一部は PhotoAC から転載させて頂きました。

“電子書籍パブー”さん閉店に伴い、大変残念ではありますが、今回を持って投稿を終了させて頂きます。

2013年8月から投稿を開始し、今回で45作目になります。

途中2年ほど休止した時期もありましたが、長い間のご愛読有り難うございました。

尚、“玲子と笑子の女刑事カップル”の物語は、後日私のプライベートサイト

の<https://355s7m77.at.webry.info/>で継続していきたいと考えます。

興味のある方、ぜひご来訪ください。

45作のバックナンバーはやがて削除されますが、11月末までアクセス可能とのことですので、宜しければダウンロードお願いいたします。

其れでは、今日まで有り難うございました、御機嫌よう——。

南海部 覚悟

万世一系の父親

<http://p.booklog.jp/book/126746>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/126746>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト